

「考えさせられる」葬儀(四)

「気遣い」ゆえに個人化する葬儀と墓

— 祭祀・追悼を求めない家族とこころのゆくえ — (前編)

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、急激な変化をみせる「葬儀」について、多角的な視点から調査・分析を行っている。総合研究所では、「葬儀」の現状を考えるにあたり、

- ① HPや書籍など、各種メディアから発信されている声
- ② 社会にあるさまざまな声
- ③ 葬儀現場に従事している専門家の声
- ④ 僧侶の声

を収集して検証を行い、現代社会における僧侶や寺院のあるべき姿に関する研究を行っている。葬送儀礼については、葬儀そのものの変化について注目されているが、「墓」や「納骨」の問題も重要であり、近年は、「永代供養」^{えいたいくよう}「墓じまい」「改葬」「自然葬」などをキーワードとして、メディア等によって「墓

や「納骨」をめぐる近年の変化の様子が取り上げられている。

2019年1月、「墓」の変化の要因を探るため、宗教社会学を専門とし、さまざまな媒体で葬儀や墓を含めた現代の諸課題について発信を続けている櫻井義秀氏（北海道大学教授）を講師としてお招きし、研究会を開催した。

研究会の講題は、「気遣いゆえに個人化する葬儀と墓——祭祀・追悼を求めない家族とこころのゆくえ」である。葬送墓制の変化とその背景について、第1部「現代の葬儀で何が肝心なのか？」と、第2部「現代人の幸福と宗教」に分けて講義が行われた。

以下、櫻井氏による講義のうち、第1部の概要を、前編として掲載する（講義の第2部は、後編として次回掲載する）。

【講義の概要(前編)】

現代の葬儀で何が肝心なのか？

一、「家族の変容」が葬送墓制を変えた

自分の経験した父の葬儀を振り返ると、忙しさがあつたが、寺院で葬儀を行うことで家族・親族・隣組の人たちにも満足してもらえ葬儀ができた。葬儀については、状況次第ではあるが、寺や葬祭業者などに依頼することで行える。その一方、墓は融通が利かない。誰が墓を見るのか。寺の檀家になるのか、公営墓地にするのか。実家の近くか、自分の家の近くか。遺骨はどう保管するのか。埋蔵するのか、収蔵するのか。墓の課題は、葬儀後に直面する場合が多く、遺族としては困りはてるケースが増えている。

墓の形態は、歴史的に見ても多様である。日本の歴史の中でかなり変化してきているが、どの時代を基準にするかで、あるべき葬儀や追悼の形は変わってくる。明治時代以降、家制度が確立していく中で、「先祖代々」あるいは「継承する」墓のあ

り方ができあがってきた。では、現代の墓の問題はどこにあるのか。それは、「誰が墓をみるのか」という点にある。「世代をつなぐ」墓は、現代では限界を迎えている。例えば、親世代と子世代の居住地域が異なる現代の産業社会では、家墓を建てても子どもにみてもらえる保証はないし、「家」や「墓」を継承する時代でもない。

かつては、子どもにあとを託すことで心配なく死んでいけた。弔いは残された者の役目であり、予めそれをやりきって死ぬ人は珍しかったのではないか。しかし現代は、子どもの墓参りのことまで心配しなくてはいけない。結果、個人や一世代の単位で葬儀や墓を考えざるをえない。「世代をつなぐ」信仰とよく言われるが、墓や法事など具体的な継承物や行事を媒介しないで「信仰」を継承するのは難しいのではないか。

日本は、2010年をピークに、人口減少社会に入っている。2100年には、出生率を最大限高く見積もっても現在の半分の人口になると推計されている。人口が減るだけでなく、寿命が長くなるという、高齢化・長寿化時代の大きな転換点に私たちはいるが、それに並行してライフスタイルが変化し、加えて葬儀や墓も変化してきている。法要も7回忌以上の回忌を行う家が減ったと言われる。親が90代で亡くなれば、7回忌を済ませた頃がおおよそ子どもの寿命となるのである。親の兄弟姉妹を法事で呼ぶことも難しいだろう。

こうした「家族」の変化が、葬儀や墓の変化の背景にあるの

ではないかと考えている。葬儀の形態をどうするのか。墓の形式をどうするのか。こうした課題は直接的に議論されている。しかし、現実のところ、家族がどうなっていくのかということに依るところが大きい。

二、「気遣い」で選ばれる墓

現在、後継者がいなくても入れる墓のあり方が模索されている。その一つとして、樹木葬墓地がある。山の中、自然に帰るといった理念で設立されることが多かったが、近年はそうした理念で設立される樹木葬墓地は少なくなってきている。

樹木葬墓地は、地域としては圧倒的に関東圏が多い。房総半島中部の内陸にある千葉県のあるお寺では、崩壊していた里山を作り直す活動の一環として、墓石のない墓、継承を前提としない墓である樹木葬墓地を始めた。その墓地の購入者に対して行ったアンケート調査から、墓選びの理由を探ってみた。

①「誰が」樹木葬を選ぶのか？

誰が樹木葬墓地を選んでいるのかについて集計すると、次のような数値となった。

自 分 … 229名 (68・8%)
 配偶者 … 76名 (22・8%)

墓を選ぶ際には、自分あるいは配偶者と一緒に決めた人が多く、「自分の親のため」という人は少ない。年齢別に内訳をみると、次のようである。

70歳未満	男性 30・3%	女性 69・7%
70～74歳	男性 38・4%	女性 61・6%
75～79歳	男性 39・2%	女性 60・8%
80歳以上	男性 50・0%	女性 50・0%

樹木葬墓地に関心を持つのは、70歳未満（終活世代）は圧倒的に女性が多いが、80歳以上になると、男女の割合は等しくなる。年配者は、墓の費用や公営墓地の競争率が高いことなどを鑑みて選ばれるを得ない状況になっていると考えている。

②墓を選ぶ理由

墓選びのポイントについて聞いたアンケート結果を2つ紹介する。

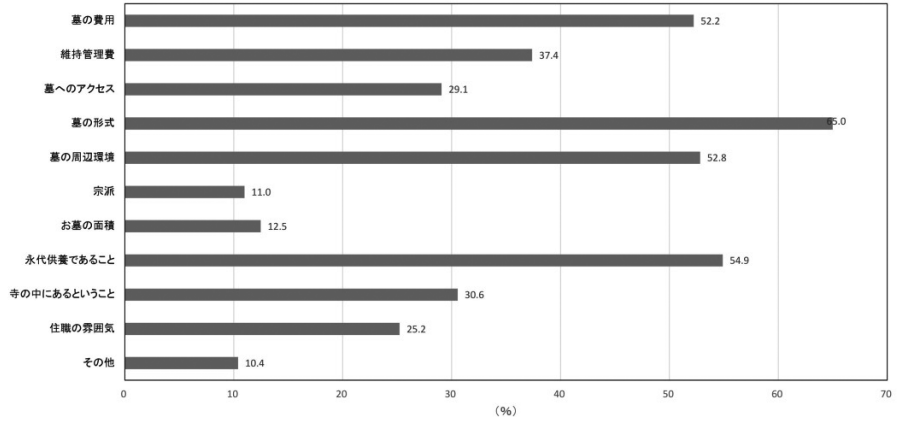
①「墓を選ぶ際に重視したこと」 ↓ 【図1】参照

墓を選ぶ際に重視したことを聞くと、次のような結果となった。

〈高い数値〉
 ・墓の形式 (65・0%)

墓を選ぶ際に重視したこと(n=337)

図1



・ 永代供養であること (54・9%)

・ 墓の周辺環境 (52・8%)

・ 墓の費用 (52・2%)

〈低い数値〉

・ 宗派 (11・0%)

・ 墓の面積 (12・5%)

②「樹木葬墓地を選んだ理由」 ↓ 【図2】参照

樹木葬墓地の購入者に、樹木葬墓地を選んだ理由について聞いたところ、次のような結果となった。

〈高い数値〉

・ 自然に帰りたいから (66・5%)

・ 継承者がいなくてよいから (60・3%)

・ 子どもに墓の面倒をかけたくないから (55・9%)

〈低い数値〉

・ 誰でも一緒に入れるから (18・8%)

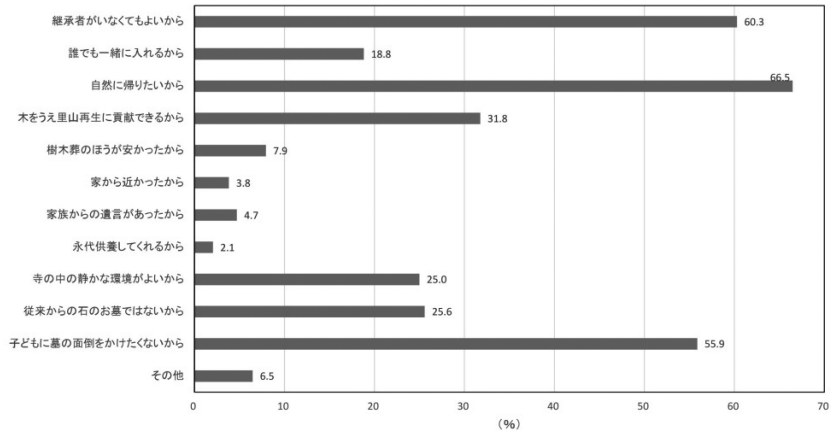
・ 樹木葬のほうが安かったから (7・9%)

・ 家から近かったから (3・8%)

以上のアンケート結果によると、墓を選ぶときには、形式や環境、金銭的負担などが影響していることがわかる。樹木葬墓地を選んだ人は、継承者にかかる負担を強く意識して、自分で契約する傾向がある。

樹木葬墓地を選んだ理由(n=340)

図 2



後継者への「迷惑がかかる」という気持ちや「気遣い」が、墓を選ぶ際の重要な要素となっている。実際に樹木葬墓地を選んでいる人々は、一般の墓を選ぶ人々と同じような方が多い。後継者はいるが、子どもに気兼ねをしてこうした墓地を求めているということになる。

なお、①の設問で、「永代供養」の数値が高いのは、おそらく自分や子どもが管理しなくていいという意味で捉えられているからであろう。宗教者の考える「永代供養」と、墓の購入者が考える「永代供養」の意味が異なっていることには注意しなければならぬ。

今回は、樹木葬墓地を紹介したが、これをモデルにすべきと言いたいわけではない。継承を前提としない墓制を作ること、継承者への「迷惑」や「気遣い」を心配している人々にアプローチできるかもしれないということを強調したい。そうした意味で、「埋め墓」と「詣り墓」のあり方も有効なものと考えられる²。故郷に埋め墓を持ち、近くの寺を詣り墓としてもよいのではないか。「墓じまい」をせすとも済む墓制こそ、新しい伝統となる。

葬儀をどうするか。墓をどうするか。不安を抱えている人は多くいるが、実際には相談する窓口が無い。ネットで検索すると、墓石業者・墓苑業者になる。お寺さんに話を聞きに行くにしても、どこに行ったらいいのかわからない。話を聞きたいのに、聞くのが難しい状態にあるのではないだろうか。

【講義を承けて（前編）】

櫻井氏は、家族の変容こそが、葬送墓制の変化の要因であると分析し、そのような要因があるにもかかわらず、葬儀や墓の形態・形式をどうするのかに議論が集中しており、肝心の「家族がどうなっていくのか」という課題にアプローチできていない現状を指摘した。この指摘は、宗教者という立場にある私たちにとって、変化の激しい葬送墓制のこれからを考えていく上で、重要である。

墓に関する課題は、形式、場所、経済的負担、継承者など、多種多様で複雑である。一人ひとりの僧侶が、一つひとつの葬儀や墓のあり方に向き合う中で、人々は何に「気遣い」、何が「迷惑」と思っているのかを知らなければならない。墓を持ちたいが、現実には難しいと感じている人々の想い。それをどう汲み取り、何を提案できるのか。研究所としては、葬儀や墓の変化のゆくえや、その変化の背景に注視しつつ、宗教者の役割を問い続けていきたい。

今回は、講義の第2部「現代人の幸福と宗教」を中心に、宗教行為を行う人々の幸福度に焦点をあてて、葬儀や墓に対する意識や宗教団体との関わりなどについて講義された内容を報告する予定である。

（報告者：総合研究所研究員 富島信海）

〈櫻井義秀氏 プロフィール〉



昭和36（1961）年山形県生まれ。北海道大学教授。博士（文学）。専門は、宗教学。

主な編著書に『人口減少時代の宗教文化論——宗教は人を幸せにするか』（北海道大学出版会、2017年）、『しあわせの宗教——ウエルビーイング研究の視座から』（法蔵館、2018年）、『宗教とウエルビーイング——しあわせの宗教社会学』（北海道大学出版会、2019年）がある。

1 国土交通省作成図表「我が国の人口の長期的推移」（平成24年度『国土交通白書』）参照。

2 「埋め墓」は、遺体・遺骨の埋葬のための墓という意味であり、民俗学・歴史学では、遺骨収集をしない石塔建立だけの「詣り墓（参り墓）」に対応する（『月刊住職』2018年11月号139頁、櫻井氏の連載「現代日本の宗教最前線の状況と問題66 これまでの墓から見たこれからの墓の姿」より抜粋）。